

星期日日语

中央电视台电视教育节目用书

中央电视台电视教育部编

中国广播电视出版社出版

日曜日の
たのしい
日本語

一九八五年第三期



H369.4

20/11

中央电视台电视教育节目用书

星 期 日 日 语

日曜日のたのしい日本語

1985—3（总11）

中央电视台电视教育部编

中国广播电视出版社

星期日日语85—3

〈总第11期〉

中央电视台电教部编

中国广播电视出版社出版

外文印刷厂印刷

新华书店北京发行所发行

1985年8月第1版 1985年8月第1次印刷

787×1092毫米 16开 印张4.5 字数115(千)字 印数1—10,500册

统一书号: 9236·053 定价: 0.78 元

目 录

1. 絶唱 (绝唱) (1)
2. 冬の置き土産 (冬天的礼物) (23)
3. 七年目のスイートホーム (幸福家庭的第七年) (39)
4. 日本語教室——日本語の特徴について (二)
 (日语教室——谈谈日语的特点 (二)) (49)
5. 語源のたのしみ——岩淵悦太郎
 (词源的探索——岩淵悦太郎) (56)
6. おとぎのへや——ぐりとぐら (童话集——古丽和古拉) ... (60)
7. 日本の歌——関白宣言 (日语歌曲——关白宣言) (65)

《星期日日语》每星期日下午三时起由中央电视台第一套节目播送。

絶 唱

ナレーション：

あれは今からもう三十年以上も昔のこと、私らがまだ幼い頃の出来事でございました。東の国境へも、西の国境へも、他人の土地を踏まずに行けると言われた谷一番の分限（ぶげん）者①山園田の若様に、花嫁さんが来なさるといので、谷中のものが皆沿道に出迎えたものでございます。花嫁さんは、それはもう本当に美しい人で、子供心にも吸込まれる②ような思いで見つめたものでございます。

ところが、驚いた事に、後からの話しではその人はその時、もうこの世の人ではなかった③のだそうです。花嫁さんはすでに死んでおられたのでございます。

（山鳩の歌）④

一、泣かせてください。その胸で、
涙の泉も枯れるほど流れる雲よ山鳩よ。
定め悲しく引き裂かれ、
死んで行きます。一足先に。

二、許して下さい。
今日までも捧げた命の短さを、
まばゆい⑤空よあわ雪よ。
愛の名残り⑥は尽きないが、
死んで行きます。一足先に。

昭和十七年

（山陰⑦のある地方）

（銃声）

正造：小雪、小雪……。

（正造の家で、小雪泣いてる）

サト：どがいしたと小雪。泣いとたって分らんが、なあ小雪、どがいしたばいな⑧。お屋敷のお許しもうて⑨戻って来ただらか？

正造：阿呆。お屋敷にご奉公のよりは、なんで黙って戻って来た。

サト：旦那様に叱られたんか。なんぞ粗相（そそう）でもしただか。どがいしたっちゅうだいな⑩。

小雪：旦那様と若様けんかしました。

正造：なに。

サト：旦那様と若様がけんかされたけて、なんでお前が泣くことがあるだいな。

小雪：でも、うちのためだけ。

サト：お前のため。

正造：本当にお前の事で、旦那様と若様がけんかされただか。

小雪：どげんしたら、ええだらか^⑪。

源助：若様、若様。

セキ：若様。

源助：お願いでございますけん。ほんのその、ちょっこり^⑫旦那様の前に手ついて、頭を下げてつかつせい^⑬。

順吉：僕は誤るような悪い事をした覚えはない。ただ小雪が好きになっただけだ。だから結婚しようと言ったんだ。

源助：さあ、若様、それが若げのいたりちゅうもんで^⑭。

セサ：旦那様は若様のため思うて、せっかくあんないお嫁がおきめとんさるのに^⑮。

順吉：お父さんの大事なのは園田家の家がらなんだ。お父さんは園田の血筋^⑯を守ることしか考えてないんだよ。

源助：ままま、理屈はともかくとして、橋本の旦那様とお嬢様がお見えになったのに、なにもわざわざ小雪の事などを旦那様に。

順吉：こんな時だからこそ僕は決心したんだ、いずれは言わなきゃならない事なんだよ。

セキ：若様、小さい時にお母様がお亡くなりなされて、それか

らずうとお乳をさしあげたこの乳母が、こうしてお願いしますけん、どうぞ今日のところは辛抱しなさって。

順吉：セキ、心配しなくても、僕はだれにも迷惑はかけやしないよ。もう子供じゃないんだ、自分の事は自分でするよ。

源助：若様。

惣兵衛：おーい、こら源助、せい。

源助：はい。

惣兵衛：どがいした、順吉は。

源助：それがその、旦那様。

惣兵衛：そうか、出て行きよったか。

セキ：すぐに戻られますけん。

惣兵衛：お前達が甘えさすからじや。^⑰わしはなあ、親に背く子を拵（こさ）えた覚えがないぞ。京都の大学にやったのは間違いじゃった。園家はもうわしでおしまいじゃなな。

惣兵衛：いやあ、どうも待たせてしまうたな。

美保子：蓄音機をお借りしております。

惣兵衛：ああどうぞどうぞ。美保子さんは西洋もんがお好きかね。

美保子：はい。これは順吉様がお集めになさったものでしょう。

惣兵衛：うん。

美保子：私の好きなものばかりですわ。

惣兵衛：どうも私らの様な年寄には西洋もんはね。あ、こりゃどうも。どっこいしょと。

橋本（美保の父）：ところで今日は順吉君は。

惣兵衛：橋本さん、実はですの。

美保子：小雪さんの所へいらしゃったんでしょう。あんな大きな声でけんかなさるんです

もの、ここへも聞えますわ、ねえ父様。

橋本：はは……。

惣兵衛：いや、全く面目ないことで。

橋本：まあご心配には及びませんよ、だれでも若い時には一度や二度親に盾突(たてつ)いて⑮みたいもんだ。あ、そのぐらゐの元気がなければ、この山園田の身上(しんじょう)⑯は持ちこたえられんでしょう。

惣兵衛：いやあ、順吉の奴め、まだ尻の青いのが消えません⑰でな。全く困った奴で。

橋本：さて、美保子、今日はせっかく順吉君と一緒に昼飯を呼ばれるつもりで伺ったんだが、どうしたもんかね。

美保子：お父様と園田のお叔様のご都合の宜しいように。

惣兵衛：ほんに美保子さんにはすまんこってした⑱のう。

美保子：いいえ、私は順吉さんを心から愛しておりますし、それにこちらのような家へ嫁ぐことは、私の幸せだと思っております。

惣兵衛：ほんに順吉にはもったいない⑲ほどええお嬢さんじゃ。

美保子：え、でもどんな人かしら、その山番の娘さん。

(正造の家)

※ ※ ※

正造：サト、俺小雪連れて行って来る。

サト：どこへな。

正造：旦那様の前出て、打つなり、蹴るなり、お気のすむようにしてもらうだ。

サト：ううん、それはいけん。

正造：なんで。

サト：旦那様はもうおらがに会ては下さらんけ。

正造：どがいしたらいいんじゃ、こげな事になっちもうて⑳。おらが旦那様のご恩を仇で返すことになるだらか。

サト：ほんだ、ほんとうだがよ。どがいしただいな、小雪。

小雪：若様が来なさる。

サト：若様が。

小雪：うち、足音で分かるけん。

サト：足音。

正造：なにも聞えやせんぞ。

小雪：うちには聞える、ああどがいしたらいいだろう。

サト：小雪。

正造：おいこれ、おい。あ、これは。

サト：若様、ああ。

順吉：小雪が来たでしよう。

正造：は、はい。

順吉：僕の気持は聞いてくれましたね。

正造：は。

サト： あ、もったいない、おら達のようなもんの娘を若様が。

順吉： なにも心配はいりませんよ。どんな事があっても、かならず僕がきちんと仕末④しますから、小雪はどこに居るんです。

正造： は、はい。それがその、若様の足音が聞えるちゅって、彼奴山鳩が飛ぶように。

(山の上)

順吉： 小雪。

小雪： 若様。

順吉： まだ若様という、若様と呼んではいけないと言ったじゃないか。

小雪： でも、うちもったいのうて。

順吉： 僕は園田順吉だ。若様なんてもんじゃない。何遍言ったら分るんだ。

小雪： こらえてつかあさい⑤若様。

順吉： 小雪。やっとつかまえた。本当にお前は山鳩だよ。

小雪： どがいしょう。こんなだいそれた⑥ことになってしもうて。

順吉： まだそんな事を言ってる、小雪、さっきなにをお祈りしてたんだ。

小雪： うち、一人で神様にお祈りするの好きだけん。

順吉： 僕の事をかい、なんてお祈りしたんだ。

小雪： 罰があたりませんように、罰が当るんなら、今の中に早よう小雪を酷い目に会わせてつかあさい。

順吉： 小雪、顔を上げてごらん、さあ、ちゃんと僕の顔を見て。小雪、覚えてるかい、僕が体を悪くして、京都の高等学校から帰って来た時、お前は今日のようにあそこで祈っていてくれたね。そして僕の顔を見ると、うちが祈ったとうり、若様は元気でおもどりになった、そう叫んで飛んでいってしまった。あの時小雪はまだ小学校の六年生だった、でもあの時から僕の胸の中には小雪という山鳩が巣をつくってしまったんだよ。小雪、もうどんな事があっても、僕の気持はかわらないんだよ、いいね小雪。

小雪： こらえてつかあさい。若様、うちは山育ちのなんも分らん阿呆ですけん。うちはとても寝相が悪うて⑦。寝言も言うし⑧、歯ざしりもするし⑨、それから台所で摘まみ食いもするし、おなかが空いて溜まらんもんだだけ。

順吉： それから。

小雪： それから、うちはとてもわがままもんで。

順吉： それから。

小雪： それから、ここがほんくら⑩で。

順吉： それから。

小雪： それから、それから、なんの取柄もない⑪阿呆な女ですけ。

順吉： 小雪のそういう所がみんな好きなんだよ。

小雪： どがいしたらいいいんだろ、うちは。ほんにどがいしょ。

順吉： さあ、いいね、僕にはお前が必要なんだ。お前も僕愛してくれるね。小雪、僕を愛してくれるね。

小雪： もったない、もったないわ。

順吉： 僕を信じて待っていてくれるね、いいね。

小雪：はい。

順吉：本当に約束したよ。

小雪：うちはなんぞの③役に立つなら、若様のお役に立つなら。

※ ※ ※

(読者会で)

順吉の朗読声：

お七夜③の祝いの餅を配るため、七組の小作人夫婦が、四俵④もついたという山園田の長男として生れた僕は、今山園田のすべての富を捨てても小雪を得たい。小雪と二人でこの世の中を生きていきたい。みずから求めて苦しみの中へ身をさらすこの僕の行動を、地主の息子の一時の気まぐれ⑤と決め付けられる⑥かどうか、それは僕と小雪との今後の生きて行く姿の上に投げつけられるさまざまな反動として、はねかえってくる⑦であろう。とにかく番⑧の山鳩は羽ばたこうとして遙かな青空を見つめているのだ。

川田：園田さん、これフィクション。⑨

順吉：いえ。

川田：じゃ、みんな事実なの。

順吉：そうです。今夜の読書会では、僕がモルガン⑩の古代詩を読んできて、その感想を述べるはずだったんだけど、もうそんな取澄ました事⑪をやってられないような気持ちになってきて、一日も早くこのノートを皆に聞いてもらって、自分のやってることを自分で確かめたかったんです。

大谷：なるほどな。

順吉：このさい言ってしまうけれども、僕はこの読書会にいられてもらっても、本当はずっと孤独でした。みんなは食うための仕事をもっている。その仕事を裏付⑫にして、文学を語り、人生の問題を話し合ってる。たとえばあなたが山で木を切る時、その木が生きていて、痛がっているような気がする。そう話すのを聞くと。

吉原：おら樵りだけん。

順吉：それなんだ、吉原君がおら樵りだ、なんでもなくそう言い話す。その自信のある言葉に、僕はもう負けてしまうんだ。たとえば大谷さん、あなたが学校の生徒のあいだの愉快なけんか騒ぎや、それとは裏腹（うらはら）⑬に先生同士の見にくいもめ事⑭を熱っぽく⑮話す時に、僕はなんだか素晴らしい文学を読んでいるような感動に襲われてしまうんです。それに引換え僕は山園田の長男として、なんのなすこともなく、本やノートの中に埋れて暮してる。そんな生活の中から、本当の文学や人生が生れるんだらうか、つまり僕は、

大谷：やあ、よく分かるよ。園田さん。君は僕達の間で、孤独であったように、僕達も君にたいしてお互にどこか曖昧な気持ちで接っていたと思う。しかし今そのノートを聞かせてもらって、みんなこれですっきりしたんじゃないかな。

笹本：しかし偉い事ちゃん、これから先は。

田中：園田順吉も非常時だな、世の中も非常時だけど。

川田：でも園田さんの恋愛は尊いわ。ぜひがんばってほしいわ。

吉原：しかしな、うら、山園田の杉山へも木を切りに行くけ、小雪ちゃんを知っとるが。

小雪ちゃんは二重にも三重にも苦しいぞら。

順吉：僕はかならず小雪との約束は守ります。小雪も僕を信じて、僕の卒業するのを待っていてくれると言ってます。

川田：あら、園田さんまた京都へ行くの。

順吉：ええ、小雪も学校はつづけてくれと言ってますし。しかしこれから僕も家庭教師でもなんでもやって、親じの世話にはならないつもりだ。

田中：うん、なるほどなあ。

川田：まただれか行くんな。

(壮行の歌声) 勝ってくるぞと勇ましく……。

(京都)

(小雪の手紙)：お父さんはお屋敷へあやまりに行きました。でも旦那様は会ってもくださらんかったそうです。小雪のためにお父さんが山番をやめさせられたら、どがいなことになるだろうかとお母さんは溜氣を付くばかり。でも小雪はなににも考えずにいつまでも若様のお帰りを待っています。

下宿の女主人：お帰りやす。お客さんお待ちどすえ。

順吉：だれですか。

下宿の女主人：いややわ、おとぼけやして㊤。奇麗なお嬢さんどすな一。

美保子：お帰りないませ。お留守の間にお邪魔致しております。

順吉：僕になにかご用ですか。

美保子：はい、順吉様のお父様からお手紙をあずかって参りました。

順吉：それはどうも。ご用はそれだけですか。

美保子：は、お手紙をお読みになっていただけませんと、私の用事は済みません。粗品でございませ、家からことづかって㊤参りました。お一人でさぞ不自由でしょうと母も申しておりました。

順吉：手紙にはあなたに身のまわりを手つだってもらう様にと書いてありますが、僕は今から国へ帰りますから。

美保子：では私もご一緒におともさせていただきます。

順吉：その必要はありません。

美保子：でも父からそのように言いつかっております㊤から。

順吉：かってにしないさい。

美保子：待って。阿呆、阿呆。

× × ×

(正造の家)

サト：ええな小雪、なんもかんも大恩ある旦那様のためだ。お前が今日こうして大きくなったのも、みんな山園田の旦那様のおかげだ。旦那様のためになるっちゅうことは結局は若様のためだ。な、分かったな。

小雲：だけ、若様にひとことだけお別れの手紙を書かせて。

サト：いけんいけん。そがいな事したら、せっかく仲を取り持って㊤、上手にしてござれ

た源助さんが腹を立てんさるて。辛抱、辛抱。な、なにもごとも辛抱だけ。時がたっちゃ忘れることもできるけな。

源助：小雪。明日は、つやま^⑥へ行くそうだな。

小雪：はい。

源助：ああ、寂しかろうがな。まあちっとの辛抱だけ。

サト：はい。もう小雪がよう弁えとります^⑦。素直な子ですけ。なあほんに素直な子だけな、源助さん、誉めてやってつかせい。

源助：ああ、そうかそうか、わしも小雪が好きだで。旦那様にはよく申し上げておくけな。

サト：なに分よろしゅうお願いもうします。

源助：ええは、分った分った。

小雪：若様によろしゅう申し上げてつかあさい。

源助：うん。よしよし、若様も昨日戻られて。

小雪：若様が戻られた？

源助：いや。その、昨日若様から手紙がきてな、今年の夏休みは戻ってこれんかもしれんちゅってな。まだ学校が始まってまもないのになんて、なんで戻ってきたりするもんか。はは……。

小雪の手紙：若様、皆様のお言葉に従い、お別れいたします。どうぞ私などをお忘れになって下さいまし。小雪はいつまでも、いつまでも若様のおなさを忘れないで、遠い所からお幸せを祈っております。どうぞ小雪をおゆるして下さい、さようなら。

（正造の家）

サト：今日はええ天気で、よかったな。

正造：峠を越した所へ迎えのもんが牛を持って来とるそうじゃ。

サト：よそのうちへ行って、後指をさされる^⑧ことのないようにな。園田の旦那様の知合だっけな。どがいな小さなことでも旦那様のお耳に入ってるけな。どがいした小雪。

小雪：若様が。

サト：なに。

小雪：若様が来なさる、若様が。

正造：小雪。

サト：小雪。

（正造の家の外）

順吉：もう離しはしないよ小雪。僕は家を出て来た。僕達は結婚するんだよ、小雪いいね、いいね。

ナレーション：

（順吉の新しい家）

こうして二人は日本海の激しい荒波と砂丘に挟まれた小さな町で、新しい生活を始めたのでございます。

順吉：おい、小雪、借りて来たぞ。案外重いもんだよ。

為吉：ああお帰りんさい。

順吉：おかげさまで、うまくいきました。

為吉：あ、それはそれは。

ハマ：ご苦労さんな事ってしたな。

順吉：明日からいよいよ運送屋ですよ。

小雪：お帰りんさい。

順吉：あ。

小雪：仕事が見つかってよかったですね。

順吉：あ、明日朝早く駅に荷が着くんだそうだ、それをを岡温泉まで運ぶんだ。

小雪：遠い所かな。

順吉：あ、弁当つくってくれよ。

小雪：うちも後押しして行きますけん。

順吉：だめだよ。お前は園田順吉の妻、しっかり家庭を守ってくれなくては。どうしたんだ。

小雪：すまんこっです。うちのようなものために、若様をこがいにしてしまうて。

順吉：小雪、僕はこんなに幸せなのに、お前は分かってくれないのか。

小雪：いつお捨になってもええですけん。ほんにええですけん。

順吉：馬鹿。なんて事言うんだ。よしそんな事言った罰だ。小雪、すまないのは僕の方だよ、とうとう結婚式も上げないで、お前を、ね、僕達は毎日が結婚式なんだ。ずうっと一生涯ね。

× × ×

大谷：こんにちは。

為吉：ええ。

ハマ：ああ、おいでんさい。

大谷：あのう、園田君いますか。

ハマ：はいはい、どうぞお上がりなんして。

小雪：どがいしましょう、若様。

順吉：慌てることはないよ。読書会の連中だから。まあ、それに若様なんて言うとは皆に笑われるよ。

小雪：そがいいわれてもどがい言うていいか。

順吉：あなたとか雪吉さんと言うんだよな。

小雪：そがいなことを言えん。

大谷：こんにちは。

雪吉：やあいらしゃい、みなさんお揃いですね、どうぞ。

大谷：やあ、今日ね、皆でついに飛びだった番（つがい）の山鳩にね、お祝をもってきたんだ。

順吉：やあ、それはどうも、どうぞ、おい。

小雪：はい。

大谷：新婚生活の感想はどうですか、奥さん。

順吉：おい、奥さんはお前じゃないか。

小雪：あら、そうですか。

皆：はは……

田中：せめてこの旅行案内で日本中どこへでもすきなところへ新婚旅行してつかあさい。

順吉：ありがとう。田中君は駅長さんだからね。

田中：いやあ、あと二十年もたてばね。

小雪：きつとなれますけん。

読書会の友人：これになかのいい十姉妹（じゅうしまつ）でも飼ってつかあさい。

順吉：どうもありがとう。さっそく見つけてこよう。

笹本：あの、これ家の店で売ってるもんばかりでほんにすまんけどな。

小雪：いいえすぐに役立つものばかり、たすかります。

吉原：おら、百姓だけ、ぼた餅[㊤]でも造ってもらおうと思って小豆をちいっとばかり[㊦]。

小雪：餅米はどうするの。

吉原：それが百姓ちゅうても、うら糶りが仕事でな、田圃がないんだが。

小雪：餅米はありますけ、ぼた餅はうちがつくりますけん。ほんにありがとうございまして。

川田：これ、あたしがつくったもので、ほんに恥しいけど、どうぞお二人で使って下さい。

順吉：なるほど、やあ、これは。

小雪：は、山鳩、山鳩がいるが。

大谷：ああ、こいつはやられたなあ。僕のはほんに平凡な夫婦（めおと）茶わん[㊧]。それから、これは僕の受持ちの四年生の子が書いたんだが。

順吉：お、小雪、山が恋しくなったら、これを見るといいよ。

小雪：ほんに奇麗な山。

× × ×

（正造の家）

正造：どがいしただい。

サト：醤油が切れたもんだけ、権助の所へ借りにいったら、かしてくれんだが。

正造：村八分か[㊨]、ああ、皆お屋敷に気がねしとる[㊩]だな。

サト：それにな、山園田の若様たら込む[㊪]とは小雪はただの小娘じゃないだと。

正造：なに。

サト：皆言うとするそうだて、あれは魔性だって、ありゃうらが山の中で昼寝しとる時、狐か蛇に見いられて出来た子だと。

順吉：…え。エ…。

（順吉の家）

ハマ：順吉さんは今日も材木担ぎかな。

小雪：はい。そのほうがすこしでもよけいにお金になるから言われまして。

ハマ：あの糶りさんがそうかな。

小雪：はい、親切ないい人ですが、吉原さんは。

吉原：大丈夫け。

順吉：ありがとう、大丈夫だ。

吉原：なれん仕事だけ、えらからうや。

順吉：どんなに辛くてもやり通さなけりゃ。

吉原：そうだなあ、でなけれりゃあなたの思情も裏付け[㊤]がねえことになるだけえな。

ハマ：ああ、順吉さんはあんたに膝枕[㊦]をしてな。

小雪：はい。この頃はくちでは言いなさらんけど、ほんに疲れれるらしゅうて、帰るとすぐうちのひざをまくらにして寝てしもうて。

ハマ：あーあ、おおきなる憩つちゃ、ああうらも戦死した亭主にせめて一度でも膝枕をしてやりたかったがよー。

小雪：（唄）寝た寝たよい子の子うさぎ、寝た寝たお山じゃ、降る雪牡丹[㊧]。

川田：園田さん。

小雪：はい。

川田：笹本さんと田中さんに召集が来たのよ。笹本さんはなるほどなるほどと言うばかりで、ぼんやりしてしまってるし。

順吉：とうとう郵便局員にも召集がきたか。

川田：田中さんの奥さんのおなかには赤ちゃんが居るんですって。

小雪：えらいこってすな、ほんにえらいこってすのよ。

川田：私達も看護婦にでも志願しなければね、今日本でも爆撃を受けるでしょうね。

皆：ほーれ、ほーれ……。

町内役員：こんにちは。

為吉：はい。

町内役員：おじいさんも足が悪いに防空演習かい。

為吉：非常時や、ちょっとぐらい足が悪いいうて、ごろごろしたらもうしわけないがな。

ハマ：ほんに年よりの冷水[㊨]じゃ言うてな。

町内役員：留守かな。とうとうきたがな。

ハマ：えらいこっちゃ、ほんにえらいこっちゃ。

為吉：やっぱりきたか。

（壮行の唄）：

天に變りて敵を討つ、忠勇無雙の我兵は、歓呼の声に送られて……。

×

×

×

（惣兵衛の家）

惣兵衛：あんたは順吉に頼まれて、ここへ来なさったのかな。

大谷：いえ、私一人の考えで伺いました。園田君にとっては生死の計り難い[㊩]出征です。

この際、今までの行きがかり[㊪]はすべて水に流していただいて、園田君をこの家から園田家の長男として堂堂と送り出してやっていただきたいのです。それはこの伝統ある園田家の名誉のためであり、ひいてはお父さんの名前を傷つけない一番よい方法だと思ふんです。

惣兵衛：あなた学校の先生をしとるだけあってなかなかええこと言いなさるな一。

大谷：では私のお願いを聞いていただけますか。

惣兵衛：うん、聞いてもええがな。一つだけ条件があるでな。

大谷：条件といいますと。

惣兵衛：それはなあ、順吉があの小娘と手切って、わしの前に両手をついた時じゃ。あんたそれが約束できるかな。

大谷：正直に申し上げます。そのお約束はできかねます。小雪さんは大変に気立てのいい

⑤、りっぱな方です。人間として、こんないい、純心な方は稀です。差し出がましい

⑥ことを申し上げるようですが、どうか、今回の事と小雪さんの事とは切り離してお考えになって下さい。

惣兵衛：そんな屁理屈がわしに通ると思うとんのか、山小屋の小娘と園田家の長男が同じ天秤に掛けられてたまるか。

大谷：じゃ、あなたは人間には生れながらにして尊いものと卑（いや）しいものがあるとおっしゃるんですか？

惣兵衛：馬鹿もん、一介の教員風情になにが分かるか、お前達にはな、このおしが分からず屋⑦の鬼にみえるやろ。しかしな、園田家には三百年の歴史があるでな、このわしの身分になったことのないもんには、な一んちゅうたかてこのわしは分りゃせん。帰ってくれ。

（順吉の家）

大谷：僕も一時はかっとなったけれど、気持が落ち着いてくると、園田君のお父さんがなんだか哀（あわ）れになって来たよ。

川田：それはどういうわけ。

大谷：封建的な因習に雁字搦（がんじがら）め⑧になって、一欠（ひとか）けら⑨の人間性もなくしてしまったような空（むな）しき、まあ結局園田惣兵衛氏はだな、人間としてではなく、ただ山や財産を守るためだけに生きている、言うなれば生ける屍とでも。

小雪：やめてつかあさい。お願いですけん。もうやめてつかあさい。且那樣はこの人のお父さんですけん、悪口はやめてつかあさい。

為吉：やあ、ハハ、わしも仲間に入れてもらいますけん、えへへ。

ハマ：この千人針⑩を町会の人が持って来てくれたですが。

順吉：やあそれはどうも。

小雪：ほんにすまんこってすな。

大谷：それじゃ、園田順吉君の武連長久を祈って干杯しょう。

順吉：じゃ干杯！

皆：干杯。

川田：どうぞご無事で。

為吉：さき皆さん、今夜は賑やかにやりましょうぜ。

ハマ：ハハ、久し振りにおじいちゃんの安来節（やすき）⑪節がでるかもしれんで。

為吉：ハハ……。

順吉： そうだ小雪、今夜は木挽（こび）き歌をやってくれる約束だったね。

小雪： でも、皆さんの前じゃ恥しいな。

川田： だめよ小雪さん、順吉さんの壮行会よ。

吉原： そうじゃ。

大谷： 小雪さんやって下さい。

為吉： わしにも聞かせておくれ。

順吉： 小雪最後の晩だよ、僕のためにやってくれよ。

小雪： はい、やります。

皆： よーし、いいぞ（拍手）。

小雪： （山の木挽歌）^㉓

はあ……。

吉野、吉野と、

たずねてくればよ、

吉野千本、花盛りよ、

はあー、

吉野黒川、木挽きをならいよ、

花の盛りを、

山奥によ。

× × ×

（惣兵衛の家）

惣兵衛： 順吉はまだ戻らんか。

セキ： はい、まだ。

惣兵衛： そうか、やっぱり戻らん積りじゃな。ああ、いらん、寝る……阿呆。

順吉： ねえ、小雪、僕達は今からお互いに心に翼を持つんだよ。

小雪： 翼を。

順吉： 心に翼を持っていれば、どんなに遠く離れていても、いつも会っていただける。分かるかい。お互いにこの事を堅く信じよう。

小雪： はい。

順吉： なにか心配事があったら、大谷さん達に相談するんだよ。

小雪： はい。うちのはのんきものですけ、一人でも楽しく暮します。十姉妹（じゅしまつ）を友達にして。

順吉： そうか、それで安心したよ。

小雪： あなた、坊主頭可愛い、中学生の時あなたとっても可愛かった。

順吉： こら、生意気な^㉔。

小雪： 帰ってきて、きっと帰ってきて。

（戦争の場面）

軍官： 小休止。

兵士： 小休止。

兵士： おい園田、いつもの時間やで。

女達：（唄）お国のためなら、えーやこーら、もう一つおまけにえーやこーら
お父ちゃんのためなら
えーやソウラン。

ハマ：そろそろいつもの時間じゃけんに、さあ約束を果たしてきんさい。

ハマ：皆、許してつかあさいよ。

皆：えーや、ソウラン。

小雪：じゃあ、すいません。

婆さん：はいよ。

女達：おじちゃんのためなら。

為吉：おい、しっかりやれよ。

女達：えーやソウラン。

小雪、順吉：（唄）

あー、吉野、吉野と、
たずねてくれればよ、
吉野千本花盛りよ、
あーいつの頃か。
木挽きをならいよ、
花の盛りを山奥によ、

（順吉の家）

川田：今でも順吉さんが住んでる様だわ、小雪さんらしいわ。

大谷：あー、帰って来たよだ、留守中に上り込んでますよ。

小雪：まあ、よく来てこされましたな。

川田：小雪さんも毎日大変やね。

小雪：いいえ、うちのような取柄のないもんは体を使って働かんことには。

川田：でもずいぶん痩せたわ、小雪さん。

小雪：そんなことはありませんけ。うちお日様の下で働くのがいっちすきですけ、ほんに。

川田：しかし小雪さん、あんまりむりして、体をこわしでもしたら。

小雪：いいえ、あの人が戦地で苦しんでいなさるのに、うちだって命がけですけん。それに約束の時間に木挽き唄をうとうて上げる。あの人もうとうて下さる。うち皆さんにお礼をいいたいほど幸せですけ。

大谷：ねえ、小雪さん、実は僕達二人で相談したんだけど、あなたにしばらく山のご両親の所に帰って体を休めてもらうように頼みに来たんですよ。黙ってさえいれば、園田へは分らないだろうし。

小雪：大谷さん、川田さん、戦争がすんだらあの人はここへ帰って来ます、きっとここへ帰って来ます。山なんぞに戻れましたかや[㊤]、ほんに。

順吉の手紙：とうとう佐野君も出征したそうだね。僕は労働したおかげで、行軍にも落後しない。君は元気だろうね。毎日聞こえて来る君の唄は、とても元気そうだから。

小雪の手紙：この頃、よいとまけ[㊤]はほんとに楽しい仕事になりました。綱引の女は八人で私が一番年下です。昨日の昼休みにどがいしたら、皆は幸せになれるかしらと私が